JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第26号
2017年3月14日発行
千葉県JICAシニアボランティアの会
Info.chibajicasvob@gmail.com

本号目次

活動報告会	1-2
出前講座	3-4
派遣国事情 千葉デスクだより	5-7
会員の動静 家族連絡会 県庁表敬訪問 ボランティア春募集	8

第22回 JICAシニア海外ボランティア活動報告会を開催

2月18日（土）、帰国された海外派遣シニアボランティアによる報告会を柏市のアミュゼ柏で行いました。渡邉会長（写真左）の挨拶と来賓者JICA東京国際センターの杉村氏(写真右）のお言葉に続いて、今回は４名が報告しました。進行は渡辺 章幹事が担当し、寒い中、会員28名、一般参加者22名の50名の参加がありました。報告者の皆さんから活動環境や任務の遂行状況、結果などに加えてお国事情も話され、持ち時間一杯の報告、それぞれに質問や意見が交わされ有意義な報告会となりました。JCOM東葛葛飾局の取材があり、2月20日のデイリーニュースで放映されましたので、さらに多くの一般の方にこの会の活動がPRできる機会にもなりました。

各報告の紹介

信清 裕人 氏 「プノンペン通勤風景二題」

2014年6月までの２年間、カンボジアの首都プノンペンにある民間航空庁という役所で、航空統計を指導する活動をしました。

健康維持のため、毎朝約20分の徒歩通勤です。当時、市内に公共交通機関はなく、現地の人は、車かモトと呼ばれるオートバイでの通勤です。日本の中古車が大人気で、ガソリン価格は日本より少し安いだけですが、何故か、大型のSUV車が普及しています。企業やお役所がガソリン代を負担（補助？）しているからでしょうか。また、郊外に行くと路面が悪くSUVの効用を納得します。車とモトによる通勤ラッシュは、アジア諸国でお馴染みです。時々、自国の大臣、諸外国の外交官、経済支援国からの外交団と思しき人を乗せた車列が、警察車両に先導され、渋滞を横目に、反対車線を猛スピードで走り抜けます。一日に数度となくお眼にかかる光景です。突然の通行規制によって交通は一時大混乱となりますが、頻度が多くて慣れているのか、これで無償の資金援助を受けることができるならお安いものと諦めているようにも見えます。

プノンペンでは、5月からの半年が雨季です。日本の梅雨と違い、ほとんど毎日、午後に一回、ゲリラ豪雨があります。傘や合羽は役立たず、雨宿りが一番です。約1時間の土砂降りの後は猛暑に戻りますが、道路が膝まで冠水し更に1時間は歩けなくなります。毎日、午後3時頃になると、雲行きを確認し、「今のうちだ」と職場の仲間に聞こえよがしに声を高め、早々に職場から退散して帰宅した日々を思い出します。

久保 治夫 氏 「防災計画（土木）」

ジャマイカの国家防災庁で防災計画(土木)の業務を行いました。ジャマイカは、ブルーマウンテンコーヒー、ボルト、レゲエ音楽等でなじみのある国です。自然が美しく、産業は主に観光業・鉱業・砂糖・バナナ等の輸出ですが、海外移住者からの送金が経済に大きく貢献しています。何事にもクヨクヨしない国民性ですが貧富の差が大きく、路上生活者も多く、女性の社会進出が盛んです。

活動により、二つの大きな成果が生まれました。

① 防災マニュアルの作成・配布・販売

ジャマイカ初の総合的な防災マニュアルを作成しました。原案作成後は、多くの関係機関にレビューを依頼し、内容も充実し、質の高い、ジャマイカに合ったマニュアルが完成しました。また販売も行い一部をホームレス支援に使用しています。大臣・大使出席による披露セレモニーをしていただき、第３回国連防災世界会議にも出展し、カリブ地域17ヶ

国にモデルマニュアルとして配布しました。

② 排水設計ガイドラインの作成・披露・施行

宅地開発業者が提出する排水設計書は問題点が多かったので、既存の排水設計ガイドラインを30年ぶりに全面改定しました。質の高い新ガイドラインが完成し、３大臣出席の下での、披露セレモニーが盛大に行われ、新聞・テレビ等で大きく報道されました。公共事業庁(NWA)のホームページにも公開されています。

お陰さまで、上記の成果により第11回JICA理事長表彰(2015年)を受賞しました。多くの広報活動も行い、ジャマイカ・ブータンの活動報告、国連開発計画でのプレゼン等がインターネットで検索出来ます。

JICA 久保治夫（和文）、JICA Haruo Kubo（英文）

濱崎　丘　氏「国際交流の現場」

平成26年9月から2年間チリのカレラという自治体で活動してきました。チリは南米の細長い国です。巨石像が立つイースター島もチリ国です。チリの首都はサンチャゴで、任地は首都から約100km離れた北西部に位置しています。

活動は短・中・長期の目標を立てました。短期目標は任地のゴミ処理活動としました。私は職員の活動をカメラで記録し、それをデーターベース化しました。中期目標は公害問題としました。公害だと危惧されている寒天工場からの排水を先ずは水質データを取得しそれを分析しました。その後チリの工場と輸出入の関係がある長野県の会社との打合せを、健康管理のため一時帰国した際に実施しました。翌年同社の幹部がチリを訪れた際、チリの自治体（官）、工場（民）、大学（学）の関係者が一堂に会した会議を開き、工場からの排水は海藻から寒天原料を抽出する際の水で公害ではないとの結論を得ました。キャパシティデベロップメントの観点からも公害問題には今回同様、連携プレーが重要であると再認識しました。長期目標は中古タイヤの再利用等５種類の課題を検討し提言しました。

文化の違いについては同僚との合奏で考えさせられました。私はハーモニカ、同僚はギターとボーカルの担当です。私は楽譜が音楽と思っていましたが、同僚は子供のころから聞きなれた絶体音が音楽なのです。この食い違いに驚きました。日本語初体験の同僚が日本語を丸暗記して歌うという意気込みにびっくりしました。当日は上手な日本語で彼は歌ったのです。こうした経験を通じて、「国際交流」という言葉の奥には、克服しなければならない多くの課題と努力が在ると改めて感じました。

羽計 諟 氏「JICAボランティア活動報告」

メキシコのオアハカ州内の村々で「一村一品運動」を含め、地域経済の振興を支援する取り組みをそれぞれの現地事情に合わせた手法で行いました。

１か所目は地元民が思い入れのある手工芸品を家族総出の作業で作っていました。ここでは、「既存産品の販売促進」を目論みました。製品をより多く販売できるよう商活動の初歩ともいうべき事柄（例えば、利潤を得るためには？新たな販売チャンネルの構築、帳簿の活用等々）から講座を始めました。個別相談や、他の様々な側面支援も試みましたが、それには興味がなかったのかついてきてくれませんでした。

２番目の村では一村一品運動（OVOP）の展開を試みました。「OVOPの進め方」などのガイドブックを作成し村の人々に配布しつつ、OVOPの概念や期待される効果などを村民に説いて歩きました。そしてリーダーと数人の推進者の育成を図りましたが、現地の人々の共同事業への関心の低さから適任の推進者を見つけられませんでした。結局、彼らが求めていたのは金銭的援助でした。

中南米諸国は援助慣れしており、「魚を与えるのではなく、漁法を教えろ」的な考えは通用せず、口では言わなくとも期待されていたのは魚でした。

今までボランティアとして行ったコスタリカ、アルゼンチンやメキシコでの私の経験では、少なくとも私の案件に関しては、現地受け入れ側はボランティアを必要とはしておらず、カウンターパートは名前だけのものでした。地元に詳しい人をアシスタントにつけてくれることもなく、新たなプロジェクトを始めるにあたっても予算はなし、机とパソコンを用意してくれただけで、ＳＶ一人で案件を推進してゆくことが前提でした。ボランティアを受け入れた理由として、受け入れ側の負担がないことや日本でのJICA研修への派遣、一部経費の援助や物品の提供などを期待してのことだったと思われます。

出前講座実施報告　（2016年8月～2017年1月）

「JICAでの海外事業体験」

8月17日（水）講師　白鳥貞夫 会員、加藤哲男 会員

両会員が標記の題で市川市公民館において、36名の出席者を対象に出前講座を行いました。

白鳥会員は、バヌアツについて講演しました。同国は「南太平洋」という映画の舞台になった島国で、人口は21万人です。国民の8割が原始的な自給自足の生活をしていますが、英国による「幸福度指数」調査で、178国中1位にランクされています。彼らの生活では必要性がほぼ無いため、約束という感覚が極めて薄いと実例を示して文化の違いを紹介しました。また、同国はバンジージャンプ発祥の地であり、そのジャンプは主食のヤム芋の収穫祭で伝統的に行われるとの説明がありました。

加藤会員は、シリアにおける食品衛生管理について講演を行いました。過去に日本から供与された検査機器が使用されていなかったり、壊れていたものを修理したり、使用方法を指導した苦労談について話されました。今までにボリビア、ペルー、シリアに赴任しましたが、各国に友達が出来たことが大きな財産になったと強調されました。

「井の中の蛙アマゾンを渡る」

－　日本国から異国のブラジルの地へ－

９月9日（金）　講師　本多孝治 会員

市原市五井公民館で楽学塾秋期の１１０名の参加者を対象に標記の演題で出前講座が行いました。

講師は、ブラジルアマゾン河流域の街ベレンに赴任し、ソーシャルワーカーとして活動しました。ブラジルでは戦前からの日系移民の多くが尊敬されているそうです。

講座の冒頭、講師は流暢なポルトガル語を披露して、参加者は意表を突かれた感じがありました。

続いてピアノによる懐かしい唱歌の演奏。音楽は世界共通語です。ベレンの日系市民同様、楽学塾生の心にも染み入ったようでした。さらに現地でのリクレーション介護活動を再現しながら、ブラジルでのボランティア活動を紹介。このようなボランティア活動を通じて、ベレンの人たちに日本の文化を紹介し、日本との深い絆を結びました。

到着した日からポルトガル語で電話対応ができるほど事前語学研修に励まれたそうで、現在ではその経験を活かし日本の刑務所で通訳などをされています。

この講座は丁度リオのオリンピックと同時期の9月だったので参加者の関心も高く、写真で紹介されたベレンの生活は興味深かったようでした。

今までの職業人生の中で、ボランティアとしてブラジルで生活した事が一番楽しかったし、思い起こすと良き人生であったと最後に講師は語りました。

「パラオの素敵な人々」

10月14日（金）講師 中村時夫 会員

柏市第七小学校において、6年生106名を対象に標記の講演を行いました。パラオは日本が大正初期以降25年間委任統治したこと等により、3万人もの日本人が居住していました。今も日本の文化風習や多数の日本語が残っており大変親日的であります。

講師はパラオ教育省で学校運営に従事され、数学のカリキュラムを作成しました。九九のテストを行い計算間違いの多い事が判明したので、彼らのレベルに合わせて指導方法を工夫し、生徒と先生方の数学能力向上を図りました。

その日の講演では、予め下調べをさせ、質問を記載したアンケート用紙を配ったりと、生徒が興味をもって勉強できるように準備し、その場でも対話のような形で話を進めていきました。

多数の写真を用いて数学教育の指導状況、現地の人達の生活の様子や彼等との交流を分かりやすく語り、１時間の講演中生徒は飽きることなく熱心に講演を聞きいっていました。最後に「大きな心を持って海外に行こう」と生徒を激励していました。

「大洋州におけるボランテイア活動」
10月15日（土）講師　渡辺章 会員

袖ヶ浦市平岡公民館において20名の参加者を対象に、渡辺 章会員が標記の演題で講演を行いました。
講師は大洋州5年(ﾊﾟﾌﾟｱ･ﾆｭｰｷﾞﾆｱ3年、ﾐｸﾛﾈｼｱ2年）、アフリカ7年等の活動経験のうち、主としてミクロネシアにおけるJICAシニアボランテイア活動について講演を行いました。
同国は900の島（人の住んでいるのは55島）よりなり、人口は10.8万人である。かつて日本が委任統治したので日本の影響は強く残っており、人口の30%には日本人の血が流れているそうです。
講師の専門はマラリア対策と国際保健（international health）で、日本が提供した千トンの船で主要な島々を巡回し予防接種の方法と公衆衛生対策などを指導しました。3種類のマラリアの症状について説明したほか、アフリカにおいて日本企業が無償提供した防蚊薬を浸み込ませた蚊帳で、年間数十万人の犠牲者を半減させたという話も披露しました。講師は多数の美しいスライドを用いて、医療活動の状況、同国人との心温まる交流、現地の生活、食べ物などを説明し、聴衆を魅了しました。

「人生の扉・海外ボランティアで得たこと」
１２月３日 (土) 講師　児玉東洋 会員

袖ヶ浦市平岡公民館において、15名の参加者に、児玉東洋会員が標記のテーマで、出前講座を行いました。
講師は、チュニジア共和国での活動（大学での水処理の研究指導）を終えた後（これが人生で最も充実していたと感じた）再就職。その後、ドミニカ共和国で再びボランティア活動を行いました。東日本大震災の直後に赴任した際、「日本人は、困難に遭遇しても約束を守るのですね。」という現地の歓迎の言葉が忘れられないとのことです。ドミニカ共和国では、中小企業を対象に、廃水処理の技術指導をしたものの、日本で培った最新の技術は役に立たず、基本に立ち返る所から始めました。また、日本から移住された方々との交流も思い出深いと話されました。
現地では、文化、言語の違いから、コミュニケーションに苦労したものの、試行を重ね「ピカチュウ折り紙」を考案して活用したところ、人とのつながりも広がって、スムーズに活動できたと、サンプルを見せながら話してくれました。
活動を通じて、特に若い人たちに伝えたいことは、①海外見聞の勧め。②国際人になる。③資格取得の勧め。の三点とのことでした。
最後に、「生涯の目標として、1%だけでも誰かのために生きてみようという気持ちがあると充実した日々が送れると思う。JICAシニア海外ボランティアという人生の新たな扉を開いてよかった。」という言葉で、締めくくりました。

「中東で過ごした2年」
1月10日（水）講師　中井邦夫 会員

市原市八幡公民館において25名の参加者を対象に、中井邦夫会員が標記の演題で講演を行いました。同会員はヨルダンに赴任し、2大学で2年間品質管理について教授しました。
同国は人口760万人で、ヨルダン人30%、パレスチナ人70%、イスラム教徒93%、キリスト教徒7%で構成されています。イラク、シリアの難民を100万人も抱え込んでいます。
まず同国における人々の暮らし、住居、食べ物、等の生活情報を説明し、多くの人の関心があるヨルダンや中東の政治や難民の問題に多くの時間を割きました。 今回は難民学校の人権教育に関する国連提供の副読本、国連救済機関の資料、新聞記事、難民キャンプなどの写真を多数用いて、公民館から求められた[人権：世界の情勢を知って生き方を考える]という難度の高いテーマを見事な話術で話されました。奨学生のための募金活動、ぶどう酒つくりなどの話題もあり、活発な質疑応答が行われ、参加者は本講座に満足の様子でありました。

平成28年8月から平成29年2月までに「千葉県JICAシニアボランティアの会」に以下の方より寄付がありました。御礼申し上げます。
中井 邦夫氏　濱崎 丘氏（日付順）

派 遣 国 事 情　現在、派遣中の会員・最近、帰国した会員のホットな現地情報です

ミャンマー

ヤンゴンの新設技術大学…やっぱり女子学生が多い

職種　コンピュータ技術　　高木 利公

ヨルダンから始まりタイ、ミャンマーと楽しかったJICAボランティアも13年間で５回目。ミャンマーは３年ぶり２回目の短期（2015年12月から10か月間）です。初回のミャンマーはSVニュース22号で「旧首都ヤンゴン（ミャンマー）での停電とパソコン」として報告しました。今回は、前任地のフォローアップも意識しての赴任でした。

3年前は「鎖国の解けたヤンゴンは活気があり商品も豊富。人々は真面目で親日的で教育熱心」でしたが、今回はタイ人と違って「本音と建前の差」も感じられ、大阪的なタイ人、京都的なヤンゴン人と感じました。

ヤンゴンの国立新設「情報技術大学」に配属。女性学長（日本で博士号）は1990年代の日本式（？）で昼休みは30分間、ミャンマー正月(4月)の長期休暇（バンコクでは２か月半）も3週間。教授達もこれを日本的と胸を張っています。

学生数800名、学部はハード、ソフト、応用の3学部で、大学院生（博士課程）は十数名です。前期は11月から4月で後期は5月から9月です。

入学者は、全国統一試験の点数で決まるので、各大学は圧倒的に女子大生が多い。情報系の大学では７割は女子学生。同年代の男子はどこに？　長年の疑問です。

--配属先で体験した大学行事を紹介します--

・12月　新入生歓迎会：

在校生が新入生の歓迎会を講堂で行い、在学生の寸劇コメディーはオカマもあり、ミャンマー語のわからない私でも面白かった。入学後1か月間の転校可能期間がすぎ、在学の確定した12月に歓迎会が行われます。

・2月　運動会（2週間）：

毎日午後2時から学部／学年別の競技会。男女ともサッカーが一番盛り上がる。女子はトウセンボ風の団体競技（"Htote Si Toe (border-crossing game)"）もあり、初めて見ました。配属学部の3年生がサッカー優勝し祝賀パーティではケーキをごちそうになりました。

・6月　植樹祭：

雨季の初めに全国で実施され私も校庭に植樹。そういえば昔ヨルダンの短大で植樹した3本の木は、成長しているのだろうか？

植樹祭

・8月　表彰式：

1年間の活動に関し、学長による学生への表彰状授与。競技会、オープンキャンパス、学力優良等で３０名以上の学生が賞状やカップを受賞。

表彰式

・9月　学年末試験後と謝恩会：

ミャンマーにもタイと同様に「先生」の日があり、学生たちが先生に謝恩をしてくれます。

残念だったのは3年前に宿題だった前任地の「停電対策フォローアップ」が今でも実現されていないことでした。

またまた良い思い出をもらっての帰国でした。2016年の暮れには、北陸先端大学院に短期留学している教え子達が上京し、鎌倉探索も楽しみました。また今年もボランティアに応募したい気持ちです。

チ リ

チリの企業指導と文化の差異

職種　品質管理　　浦木 仁

定年退職後、初めてのシニア海外ボランティアとしてメキシコで活動し、生産改善活動に手応えを感じました。そして今回、ほぼ同様の仕事でチリに行きました。これら２つの国の文化の差異にも少し触れていきたいと思います。

南米チリの面積は日本の約２倍ですが、人口は1,800万人と少なく、金属資源が豊富で、関連の金属加工業を中心に中小零細企業が多いのですが、完成品は輸入に頼っているため、工業はさほど発展していません。私は首都サンティアゴから30ｋｍ程離れた、組合会社が約４０社、社員５人程のサンベルナルド企業組合（ＡＩＳＢ）に赴任しました。

活動目的は、「当組合企業を日本式改善技術で支援し、生産性と品質を改善する事」と明確で、受入れ体制は積極的でした。しかし、ＡＩＳＢは初めてのボランティアの受入れだったので、まずは日本式生産管理方式の教育から始めました。毎週３０分の改善教育会議は、５Ｓ(整理・整頓・清潔・清掃・躾)、安全、改善、管理の4テーマについて１０回ずつ行い、会議の終わりにはゼロ災を誓う指差呼称を実施しました。また、ほぼ同時に導入した毎朝のラジオ体操は、長くは続かないだろう…という私の予想に反し、250回を超えて継続実施することが出来ました。これにより、ＡＩＳＢに日本式生産管理の発信拠点としての自覚が芽生え、また私のスペイン語能力の研鑽もでき？　仲間意識も強くなり、互いの自宅への招待も始まり、生活・活動の基盤が出来ました。

工場へ最初に訪問した時、最近の事故として指を切断した写真を見せられ、衝撃を受けました。また、その他の工場でも安全対策に問題が多く、日本の安全文化を導入する必要性を感じました。そこで個人の安全能力アップ技術として、指差呼称や診る目の眼力育成、そしてラジオ体操、組織力アップ技術として改善提案や安全パトロール等を紹介していきました。チリはメキシコよりも、個人責任、秘密主義の傾向が強いようです。しかし、これらの活動で、少しずつ安全の意識が変わってきていると思っています。

企業の訪問指導は、計１４社(含１大学)、５２回実施しましたが、前半１年間はリピーターが少なく、訪問回数が増えませんでした。チリ人は非常にまじめな人が多く、おおらかなメキシコ人気質と違い、厳しい指摘よりほめる指導が適していることが分かってきました。よって、訪問報告書では現場の良いところを指摘し、講習では実例や動画を使い、魅力ある指導を心掛けました。そして、経営トップの参画を促すため、必ず報告書を直接送付して問題提起をしました。これらの活動が改善継続に繋がり、後半１年間は訪問回数が増えました。７社を継続改善対象会社とし、複数回の訪問指導を行った結果、５S、安全対策の改善が進み、改善会議や提案制度等も数社が導入し、今後の進展が期待できる結果となりました。なお、技術説明

建材用金属加工工場での改善指摘風景

用資料は、メキシコの資料をもとにチリの実例等を追加し、更に、チリでは通訳を伴わない活動だったので、2ヶ国語（スペイン語、日本語）で併記し、成果物(約200ﾍﾟｰｼﾞ)として伝承しました。

メキシコでは、時間や約束事が守られないことが多く、とまどいもありました。でも、チリの文化、国民性は、日本に近いと感じています。ラテンアメリカにおいて、非常に性格の異なる２国で活動し、良い経験が出来たと思っています。

コロンビア

コロンビアの生活事情

職種　災害・防災対策　　伊藤義博

コロンビアと言えばコーヒーとゲリラと答える人が多いでしょう。確かに日本に伝えられることはこのことが一番多いかもしれません。昨年10月にはこのゲリラとの和解交渉が成立し、サントス大統領がノーベル平和賞をもらいました。半世紀にわたる内戦に終止符を打つことになりました。

コロンビア人は行くまで、とても人懐っこくて親切で陽気な人々だと感じていて、麻薬取引や強盗犯罪などが多いとはとても考えられませんでした。コロンビアは日本の６倍ほどの面積があり、カ

リブ海沿岸やアマゾン地域は暑く、アンデス山脈の高地に行けば涼しく、１年中気候の変化はあまりありません。日本にいると毎日の天気予報が気になりますが、こちらではほとんど変化がないのでテレビのニュースでも天気番組がないのが特徴です。

私が以前活動していたメデジン市は標高1500ｍで朝14℃、昼32℃ぐらい、現在の首都ボゴタ市は標高2600m、朝９℃、昼２３℃ぐらいで、いずれも冷暖房装置が必要ないのです。街には熱帯植物が多く見られ、年中花が咲いています。ボゴタでは生垣にブーゲンビリアの花が多いようです。日本へは多くの花が輸出されています。菊、カーネーション、ひまわり、バラ等です。特に日本のカーネーションの70%から80%はコロンビアからの輸入と言われています。

また、ボゴタ近郊にも3000mから4000m級のアンデス山脈があり、パラモ（páramo）という湿地帯は、ボゴタ市の水源となっています。そこにはフライ・レホーンという植物の群生地（写真左）があり、気温が１０℃以下で湿気があるところに生えています。花は黄色い花びらでとても美しいです。先日チンガサ国立公園という所にハイキングに行ってとても感動しました。やや冷たい霧雨の中を歩き、他国では見られないような幻想的な景観は世界遺産になってもおかしくないような気がします。

次にボゴタの交通事情について話しましょう。ボゴタ市内の主要交通機関としてトランスミレーニオという２両から３両の連結バス（写真右）が走っています。料金は１７００ペソ（約６０円）でどこまで乗っても同じです。朝夕の通勤時間帯はもちろん昼間も混雑している時があります。専用道路を走っていますが、最近はボゴタ市内も交通渋滞がひどくなって来ました。車は日本車も多く走っていますが、バイクも多く日本製はとても人気があるようです。それよりも自転車が多いのにも驚きです。しかも専用道路（ciclovia）が整備されそのほとんどがマウンテンバイクなのが印象的です。

JICA千葉デスクだより

[はじめに]

JICA千葉デスクの国際協力推進員は1月20日付けで和泉澤浩さんから永井大策さんに交代になりました。

和泉澤さんは平成26年2月に着任され、３年間の任期を終了されました。ご在任中はいろいろ当会にご支援いただき、有難うございました。今後のご活躍を祈念いたします。

「和泉澤さんのメッセージ」

JICA千葉デスクは、千葉県内のJICA窓口として、JICA事業や国際協力に関わる業務を、自治体、学校、市民の方々のご協力を得て行ってきました。千葉SV会の皆さまには、出前講座をはじめ、イベントでのブース出展、帰国報告会などの活動に、非常に精力的に御協力をいただきまして、誠に有難うございました。今後もますますのご活躍をお祈りしております。

「永井さんのメッセージ」

はじめまして！JICA千葉デスクに着任致しました永井大策（ながいだいさく）です。昨年9月までフランス語圏中央部アフリカのガボンで養殖隊員として活動しておりました。

千葉県のJICAボランティア支援事業、国際貢献事業をより一層盛り上げていきたいと思っております。

引き続き皆様のご支援ご協力賜りますよう宜しくお願い致します！

「千葉県JICAシニアボランティアの会」の平成29年度通常総会が5月13日(土)午後に千葉市民会館で開催されます。当会員の参加をお待ちしています。詳細な案内は４月以降に会員宛にメールを送付します。

会員の動静

・会員数　103名（平成29年1月末現在）

平成28年4月1日から平成29年1月末日までの間に帰国された方は次のとおりです。（敬称略）

・江田 隆正（千葉市）　グアテマラ、廃棄物処理
・添野 良一（鎌ヶ谷市）　ウルグアイ、剣道
・高木 利公（館山市）　ミャンマー、コンピュータ技術
・濱崎 丘　（柏市）　チリ、環境行政
・山口 智史（柏市）　メキシコ、品質管理

平成29年1月末日現在の派遣中の方は次のとおりです。（敬称略）

・石橋　明氏（山武市）　ガーナ、電子工学
・伊藤 義博（千葉市）　コロンビア、防災・災害管理
・岡崎 英子（千葉市）　モロッコ、音楽
・黒田 啓嗣（野田市）　メキシコ、コンピュータ技術
・佐々木　英夫（流山市）　ペルー、日本語教育
・鈴木 核（市川市）　ザンビア、経営管理
・建川 大輔（鎌ヶ谷市）　マレーシア、電気通信
・田畑 成章（柏市）　ウズベキスタン、経営管理
・中西 陽典（我孫子市）　アルゼンチン、経営管理
・中村 良一　（習志野市）　ペルー、冷凍機器・空調
・ﾍﾞﾋｼｭﾀｲﾝ 玲子（佐倉市）　ニカラグア、日本語教育
・増田 光司（市川市）　モロッコ、日本語教育
・宮崎 征士（流山市）　ザンビア、観光開発
・村田 径聡（船橋市）　マーシャル、コンピューター技術
・山崎 勝也（八千代市）　カンボジア、コンピューター技術
・吉田 知弘（君津市）　チリ、作業療法

千葉県JICAボランテイア家族連絡会

千葉県JICAボランテイア家族連絡会が9月3日(土)13:00～16:00に千葉市民会館にて開催され、派遣中のJICAボランティア（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会シニアボランテイア）の家族44名が連絡会に参加しました。JICA千葉デスク、和泉澤課長の総合司会で始まり、JICA東京国際センター　市民参加協力第一課　杉村悟郎課長が挨拶されました。その後ボランテイア経験者がそれぞれの国の活動状況、生活事情等を説明し、質疑が行われました。その後、いくつかの地域のグループに分かれて詳細な活動報告が行われ、発表者及び経験者の説明に参加した家族は安堵した様子で散会となりました。

JICAシニア海外ボランティア千葉県庁表敬訪問

9月23日(金)に平成28年度第２次派遣予定のＪＩＣＡボランテイア（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア）22名と帰国されたJICAボランテイア2名が千葉県庁を表敬訪問しました。式典に於いて千葉県総合企画部　遠山部長はボランテイア事業は国際貢献に尽くし、もっとも国際貢献に直結する重要な事業であることを強調されました。又、3年後にオリンピックを控え、人々にチャンスを与え希望を与えるこの大会に、千葉県は積極的に取り組んでゆくことを強調されました。今回のシニア海外ボランテイアは帰国者1名、派遣予定者4名で、全員当会に入会されました。

JICAシニア海外ボランティア春募集説明会

シニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の春募集が３月31日（金）から５月10日（水）まで行われます。千葉県内では、右記の通り募集説明会（体験談＆説明会）を開催いたします。会場ではボランティア経験者による個別相談もあります。両日ともシニア海外ボランティアと青年海外協力隊との合同説明会です。申し込みは不要ですので、興味のある方は直接会場にお越しください。

JICAシニア海外ボランティア春募集説明会：

・４月１日（土）14：00～16：00
　千葉市文化センター　セミナー室
　（JR総武線「千葉駅」より徒歩10分）
　（京成千葉線「千葉中央駅」より徒歩10分）
　（千葉都市モノレール「葭川公園駅」より徒歩3分）

・４月12日（水）19：00～21：００
　船橋フェイスビル6階　きららホール
　（JR・東武 「船橋駅」より徒歩2分）

＊いずれも参加費無料、入退場自由です。